

音楽の起源

音楽の起源がどのくらい昔まで遡れるかはわかりませんが、おそらく言葉と同じくらい古いものでしょう。単なる鳴き声から言葉が生まれたとき、意味のある音というものを人間は初めて手にしたのでしょうから。

もちろん動物の鳴き声にも意味があるようですし、フランスの音楽学者ダニエル・シャルルは「音楽は言葉以前に存在しているのだ!」と「声に関するテーゼ」のなかで主張し、歌は言葉に先行すると述べています。(シャルル 一九八五)

シャルルが声の「地理」ないし「地学」、つまり生成について述べた言葉が、声の「歴史」あるいは「考古学」といった起源をめぐる事柄についても当てはまると拡大して解釈してみれば、人間が人間になる前、言葉を持つ以前からすでに「歌」を持っていたといえるかもしれない。

しかし、動物の鳴き声を通常、音楽とは呼ばないようです。それを発するものから湧き出すものが理性というフィルターを通して音となったとき、初めて「音楽」となるといえる、というのが、近代という時代の思潮の生み出した「表出・表現」という行為に重きを置く考え方であり、現在でもそれは根強く浸透しているのではないのでしょうか。

文化的・社会的効果としての、歌声の言葉パロレムへの従属というのは、一部の現代の音楽家たちによってまったく正当にも再び疑問符を付されうるものであり、だから様々な叫び声や息吹きや身体ノイズを、非音楽的だとか反音楽的だなどと決めつける前に、もっとつぶさに見つめるべきなのである。

(シャルル 前掲文)

では、動物は理性を持っていないのか。

理性とは呼べないかもしれませんが、本能と呼ばれるものにも、何らかの規則があります。その生命の保存と発展を促すシステムから、「魂」と呼べるものを導き出すことは可能でしょう。

古代人はこの世にある全てのもの、動物や植物といった生物にとどまらず、石や水、川や海、炎や星といった無生物まで、全てが魂を持ち、「言葉」あるいは「歌」を発していると考えていました。

『日本書紀』につきのような記述があります。

葦原中国は、磐根、木株、草葉も、猶能く言語ふ。夜はホ火の若に喧響ひ、昼は五月蠅如す沸き騰る（……）。

ここで言う葦原中国は高天原という神々の住む国から見たこの地上のこと。そこでは岩も木も草も喋り、夜は炎のようにわめき、昼はウンカという虫のように、あらゆるところ

で霊が騒ぎ立てていたというような意味で、なんとも不気味な場所です。

西郷信綱はこうした記述について、「草木ことごとくもの言うを、万有活物論（アニミズム）に持つて行つて説くのは、特殊を空虚な一般形式に帰属させようとするものであつて、たいした理解のたしにはなるまい」としています。が、記紀神話の理解という点ではそうですが、やはり、こうした思考と想像力の根底には、古代人の心性として、万物に精霊が宿るといふアニミズムの世界観を見ることができるようになります。

民俗学者の谷川健一は、『うたと日本人』のなかで次のように述べています。

古代の日本人は言葉にもアニマ（靈魂）があると考えた。これを言霊と呼んだ。言葉に出して言ったことは、現実を動かす力をもつという信仰である。

（谷川 二〇〇〇）

そして谷川は民俗学者・国文学者の折口信夫や中国文学者の白川静の論考を踏まえて、「歌」「うた」とは神に「うった」えるというところから出来た語であると説いています。

谷川の本は「うた」、つまり和歌の成り立ちについて述べたものですが、僕たちはこれから、「神に訴える」音楽について見てゆきます。神に訴え、ときに神を従わせる術、「魔術」と「音楽」との関わり合いについてです。

シャーマンについて

後期石器時代の人々が描いた洞窟壁画に、有名なラスコーの壁画があります。

作家・思想家、ジョルジュ・バタイユが注目したのは、そこに描かれた、鳥の仮面を付け、両手がかぎ爪のようになっていて、性を勃起させた、奇妙な人物でした。バタイユは人類学者の言を引き、この人物はシャーマン（シャーマン／シャマン）であるという説を記しています。後に死期の迫るなか、彼は『エロスの涙』のなかで、この「ラスコーの謎」を出発点に、エロスとタナトスを論じています。僕らの祖先が「ヒト」となった時から、性と死、連続と断絶とは両者の緊張状態において強く結びついているのでしょうか。

ところで、シャーマンとはどんな人々のことを指すのでしょうか。シャーマンとは、人間の暮らす世界と神々や精霊、死者の霊の住む世界とを自由に行き来して、なおかつ神々

や靈に操られることなく、靈的な存在と対等以上の關係を保てるほどの力を持つ人のことです。

魔術師のようでもありますが、重要なのは、シャーマンは彼や彼女の属する社会、共同体に認知された存在で、彼らも自らの仕事をそうした集団のために行うという点です。彼らは、時に供儀を行う司祭であったり、呪術的な医師、占い師、生者と死者の魂の交通をはかる者であったり、さらに詩人、歌手、音楽家でもあります。

シャーマンの彼岸への旅は、個人的なものではなく、その属する共同体の利益を代表して行われるものですから、彼らには、旅の様子をその社会の成員に伝える義務があります。シャーマンは太鼓を打ち鳴らしながら踊り、語り、あるいは歌います。彼らは、死者の世界、先祖の世界と通じている者、つまり、その社会の歴史を知る者として、自分たちの過去の（神話的）物語や叙事詩を語る詩人でもあります。

シャーマンが靈の世界へと旅立つことを脱魂（エクスタシー）と呼びます。そして、それを行う儀礼をセアンスと呼びます。セアンスのときにシャーマンは、自らのうたう歌、叩く太鼓の音の響きで、彼を助けしてくれる靈、補助靈を呼び出します。激しいリズムと音

響、それに合わせて踊るうちに、シャーマンは補助霊と出会い、憑かれた状態になります。そして、ついに意識を失い、肉体から脱したシャーマンは、補助霊の助けを借りて、この世の向こう側の世界へと旅立つのです。

シャーマンを単なる呪術師と分かつのは、彼らが単に霊の依り代となるのではなく、脱魂・脱我という神秘体験の本質が、世界の宗教の秘教的部分に見られる神秘主義の系譜のもとにあるという点です。

彼らは神霊たちに憑かれる、あるいは霊を呼び出すことにとどまらず、霊の住まう異次元の世界へと自らの魂を旅立たせます。その点もまた単なる呪術師とは異なる存在といえるでしょう。

太鼓はシャーマンにとって欠かせないものです。それは彼らの他界への旅のための馬や、航海のための船のようなものです。太鼓にはシャーマンの補助霊が宿ります。儀式が進むにつれ、太鼓の表面を擦るようにして打つシャーマンの手は、次第に速くなってゆきます。その音は霊を招き寄せます。そして霊が訪れたとき、シャーマンの手には太鼓のばちが持たれ、一層高らかに太鼓は鳴り響きます。